



## 股関節高分解能MRI検査 3.0T(テスラー)MRIを用いた関節唇の描出

単純X線検査では原因の分からない股関節痛を有する疾患に対し、MRI検査は有効な手段になりえます。

単純X線検査では、診断を行う上での十分な情報が得られない場合があります。その理由は、関節を構成する骨や軟骨等（軟部組織）の「X線透過率」にあります。骨の条件で撮影した写真ではX線透過率の高い軟骨は写りません。また、たとえ軟骨や靭帯、筋肉に条件をあわせても、それぞれのX線透過率にはあまり差がないため、有効なコントラストは得られません。そのため、各部位に適した造影剤を関節腔などに注入してX線撮影を行うことがあります。

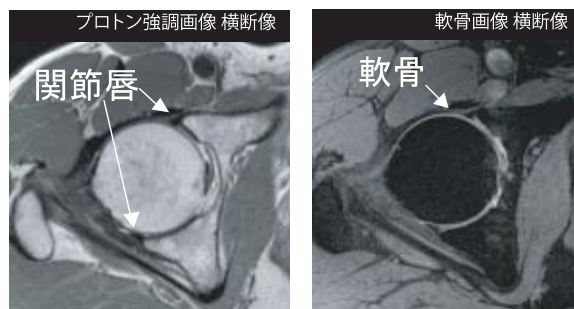


股関節も同じ理由から、軟骨や関節唇の損傷を確認するために、陽性関節造影（水溶性ヨード造影剤）を注入した後、X線撮影が行なわれたり、関節造影後にX線CT撮影を施行することもあります。しかし、X線被曝や痛みを伴い、決して患者様に優しい検査とはいえません。

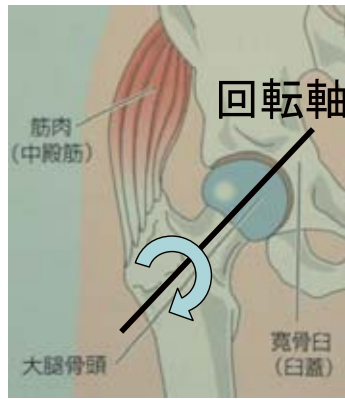
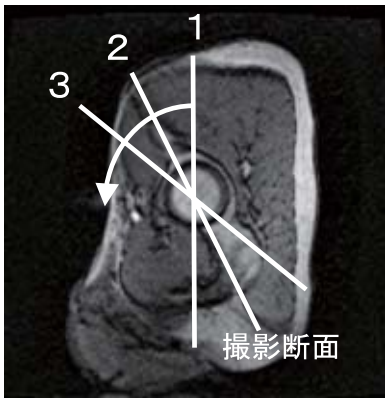
一方、生体内の水分に含まれている水素原子核の陽子（プロトン）の共鳴現象から得られるMR信号により、様々な方向からの断層撮影が可能なMRI検査はX線を用いていないため被曝が全く無いことが大きな特徴です。全ての関節がこの検査の適応となりますが、股関節ではおもに変形性股関節症、大腿骨頭壊死などの診断に用いられています。

今回我々は、3.0T（テスラー）MRI装置を利用し、高い分解能で股関節を撮像することで、通常の単純X線検査やMRIでは診断は困難で、原因不明、坐骨神経痛、滑液胞炎などと診断されやすい股関節の関節唇損傷の描出を試みております。

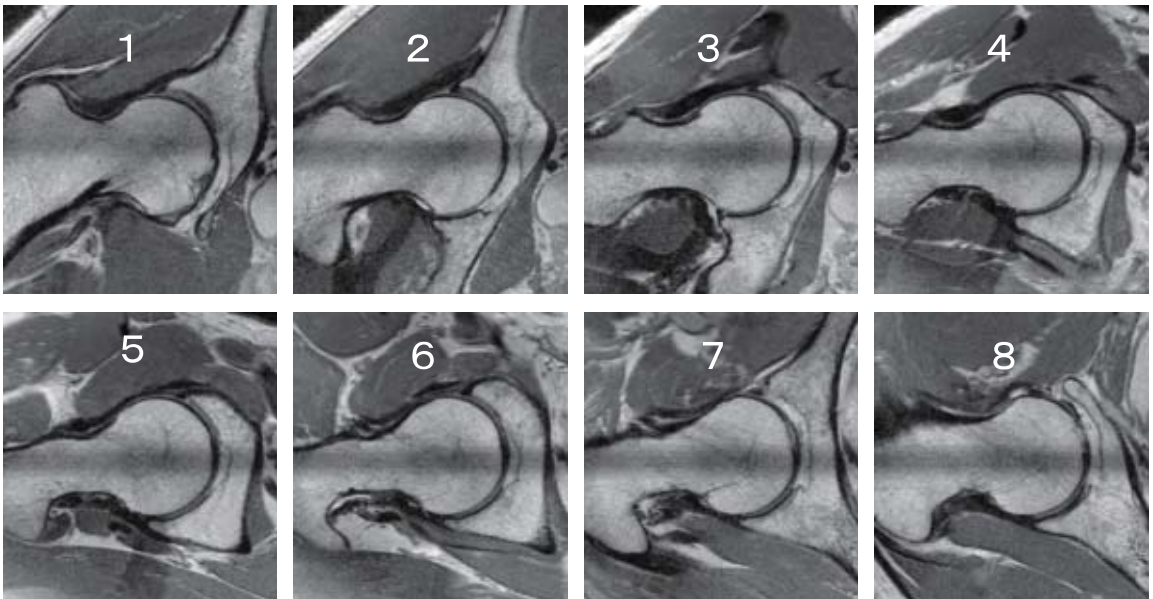
この領域は関節鏡を用いた検査もございますが、非侵襲的なMRIを用いての診断が可能となれば、もう一つの診断手法としてご利用いただけるものと考えております。



次のページへ



股関節関節唇は寛骨白蓋の切痕部以外の全周にわたり付着しているため、関節唇を観察する場合は、臼蓋を貫く軸を中心とした放射状の多方向からの観察が有効です。



メディカルサテライト八重洲クリニック

技師長 田淵 隆

## 造影検査を希望される患者様の腎機能記載について

当クリニックではCT・MRI検査において造影を希望される患者様について、先生方へ腎機能の確認をお願いしております。これは本来尿路排泄される造影剤が、腎機能の低下により体内に停滞することで副作用を生じる確率が高くなるという報告に基づいているもので、造影剤各製造メーカーにおきましても添付文書に注意事項として記されております。

一方で外来の患者様には造影検査だけのために血液検査を行う手間はかけられない、というご意見がありましたので、今回新たに作成した依頼票の腎障害確認事項欄に、『未検』のチェック欄を設けております。

従来、腎機能についての記載が無い場合には、先生方に問い合わせのお電話をさせていただいておりましたが、今後は、依頼票内の「未検」欄にチェックを入れていただければ、先生方への問い合わせはせずに、当クリニックにて患者様に腎機能についての問診を実施いたします。

その際、腎機能に問題があると医師が判断した場合は、造影を中止することもありますので、予めご了承くださいますようお願い申し上げます。

引き続き腎機能について依頼状に記入していただきますようお願いいたします。

メディカルサテライト八重洲クリニック

院長 小倉順子